

先住民族・ビラーン族とともに

ー 現地カウンターパート CMB の役割の変化ー

CMB も当会の活動も、ビラーン族等ミンダナオ島の文化的少数派を、単なる少数民族 (Minority) でなく、先住者としての権利を持つ先住民族 (Indigenous Peoples) とする見方に基づいて行われていますが、本通信の 17, 19 号でも触れたように、法律 IPRA で先住民族の先祖伝来の土地 (Ancestral Domain) の使用权が保障されたことで、入植者や大規模開発資本と住民とのトラブルにかかわることから、組合育成など自立へのプロセス、それに必要な知識や技術習得に支援の重点が移ってきました。

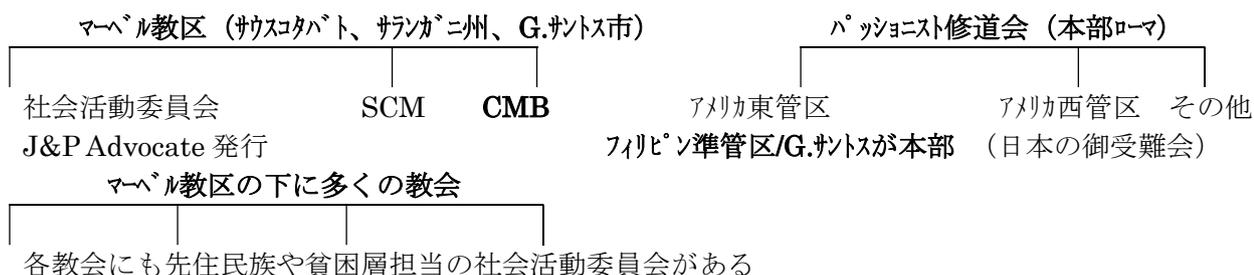
当会設立前の 1996 年 4 月に、当時の CMB ディレクター・ビトイ神父と訪ねたドールのパイナップル農場の印象は強烈でした。ビラーンの伝承にも出てくる聖なる山、マトウトウン山麓に広がるパイナップル畑の通路に、約 200 家族が抗議の掘っ立て小屋を立てて 2 ヶ月、先祖伝来の土地奪回のアピールを続けていました。ビトイ神父は当時、マーベル教区の社会活動委員会のトップも兼任し、機関誌「正義と平和」には、各地の土地をめぐる闘いが取り上げられていました。

後継者ノノイ神父時代にも、オーストラリアの多国籍鉱山会社とビラーンの土地をめぐるトラブルがあり、CMB 事務所に鉱山会社の幹部が押しかけたことがありました。

ミンダナオは今も内外の開発資本にとってフロンティアで、開発のためにムラを追われた Moro (イスラム系) 及び Lumad [非イスラム系] の避難民の話を知ることがありますが、CMB を通じて当会がかかわっているビラーン族コミュニティーに関しては、前号で紹介のアトゥモロク地区での入植者集落とのトラブルを除いて、このところ比較的平穏に過ぎています。

以上のように、CMB は約 40 年間ビラーン族コミュニティーにかかわってきた一種の NGO [非政府機関] ですが、キリスト教組織のため、私たち日本人にはわかりにくいとの声もあります。

先住民族にかかわる部門に限定して簡単な組織図を作ってみました。



CMB:パッションイト修道会アメリカ東管区から派遣された米国人神父が 1958 年にビラーン族コミュニティーの一つ、ボールールを拠点としてミッション活動、教育、医療等の支援活動を開始。現在はフィリピン準管区となり、その中の 3 人のフィリピン人司祭が担当。

なお、もう一つの特別先住民族担当部門は SCM で、これも同じ修道会が始めたが、今は直接関与していない。レイクセブ町のチボリ族が対象。

頭の痛い教師の再教育問題 ーもう待ったなしの DECS [教育文化スポーツ省] 厳命 ー



教育対象のロバート(後列向かって左、キアミ分校)、ローウェンダ(前列左、サムラング分校)

安い給与と厳しい勤務環境の中、今年も 15 名の教師が、子どもたちの教育と住民組合の運営指導等にごんばっています。このうち、ゴンザロ、ロバート、ウエンダ、チャリタの 4 名は、小学校教師に必要な最低単位を大学で取得していなかったため、法律 7836 号に基づき来年度は教壇に立てなくなりました。法律施行は 1994 年ですから、6 年間例外措置を認めてもらっていたこととなります。実績と熱意ある 4 名を再教育して、また山の学校に迎えるのが最良の選択として、CMB はその間の代替教師の雇用、複式学級の増加など対策を練っています。現職教師の再教育事業は住民の自立に直接結びつかないので、助成対象になりにくいのですが、最優先課題であるため、この 12 月に NIA に申請しました。[事務局]